

奈良・南市町自治会本春日宮曼荼羅の制作時期とその意図について

竹嶋康平(泉屋博古館)

春日宮曼荼羅は、南都・春日社への信仰に基づき、春日の社頭景観を描いた礼拝画である。現存作例のうち大半が、画面上方に春日山、画面中央に参道、その参道の左右に社殿を配し、一の鳥居から春日山までの領域を西方向から俯瞰的に描く。その中でも近年注目されているのが、一際大幅でモチーフが詳細に描き込まれた奈良・南市町自治会本(以下、本作)である。

本作の景観年代については、谷口耕生氏が文永四年(一二六七)を上限としたが、その根拠となる榎本瀧が同年より前に存在したことが松村和歌子氏によって明らかにされた。佐藤章氏は新たに、弘安六年(一二八三)から永仁元年(一二九三)の間に桁行六間から七間へ増床された着到殿に注目し、七間で着到殿を描く本作の景観は弘安六年を遡らないとしたが、仁平三年(一一五三)時点の着到殿は七間であったという建築史の指摘があり、佐藤氏の説も見直す必要がある。そこで発表者は、本作の五位橋の手前に対置された桜と柳に着目し、これが建長三年(一二五一)に興福寺僧によって参道に植樹されたものだと考え、本作の景観年代は建長三年以降であることを示す。

また様式論からも、谷口氏が指摘するように、本作は文永十年(一二七三)成立の大東急記念文庫蔵金剛般若経見返絵春日若宮影向図より先行している。さらに基準作例と比べると、弘長二年(一二六二)作と目される畠山記念館所蔵清瀧権現像の画中襖絵の表現とも類似しており、本作は一三世紀半ば過ぎ頃の作とみられる。

本発表では、以上の制作年代論を踏まえ、詳細に描かれたモチーフの意味について考えることを主眼とする。春日奥山の谷間に描きこまれた杉小立については、その右隣にある香山という水神信仰の聖地と関係しているとの谷口氏の指摘がある。加えて、奥山右方の桜樹も、水神信仰と関係が深い上水谷神社の位置を示していると考えられる。こうした水神信仰の中心には春日若宮への信仰があるが、本作では、若宮神が御旅所へ遷幸する際に用いられる拝殿御廊の扉を半開きで描き、御間道の山側には若宮社からの水の流れを表すような青い彩色が確認できるなど若宮社から御旅所に至る若宮おん祭のルートが強調されている。だとすれば、神楽殿内の人物に関して若宮影向説と巫女説があるが、前者と考えるのが自然であろう。

こうした水神・若宮信仰の背景には興福寺の存在があったが、他にも興福寺が東大寺と領有権を争った若草山、興福寺僧の葬礼が行われた白毫寺を中腹に有する高円山、若宮社と同じく興福寺が創建に関与した三十八所神社や興福寺領に建設された春日東西御塔を霞で隠さずに描くなど、興福寺ゆかりの場所が画面内に収まるように画面域が決定され、興福寺側の領有意識を反映した春日社の社頭景観が描き出されている。

本作は、興福寺が担い手となった中世的春日信仰を画面に体現したために、以降の春日宮曼荼羅の定型につながったと考えられる。